

障害のある子どもの人間関係づくり

1 はじめに

ここでは、障害のある子どもを特殊学級に在籍する知的障害、情緒障害の子どもに限定し、学校現場においてどのように人間関係を築いていったらよいか、考えていきたいと思えます。

障害のある子どもにとって、人間関係を築いていくことのできる力を身に付けることは、将来社会に出て集団の中で生活していく上でとても重要なことです。障害の種類や程度に差はあっても、段階的に身に付けさせていかなければならない使命と責任が、教師にはあります。ここでは、教師がもっていなければいけない心構えについて考えます。



- 1 障害の状況、発達の状態を的確につかみ、段階に応じたきめ細かい指導を
- 2 楽しみながら、無理のない環境の中で通常学級児童・生徒との交流指導を
- 3 教師間の共通理解の上に立った指導を
- 4 保護者との連携を生かした指導を

2 障害の状況、発達の状態を的確につかみ、段階に応じたきめ細かい指導を

ここでは、障害の状況、発達の状態を「興味・関心」「集団参加」「言葉」の3項目に分け、その指導を考えます。

(1) 興味・関心

仲間と行う活動に興味をもてる子どもの場合は、いかに仲間と関わっていくことができるのかを吟味し、そのセッティングに心を砕いていけばよいでしょう。たとえ、本人のコミュニケーション能力や活動できる範囲が十分でなくても、興味・関心があれば、こちらの工夫次第で仲間と関わらせていくことはできます。

何らかの事情で活動に参加できなくなってしまった子どもの場合は、無理やり集団参加を強要するような言動を避けるべきです。無理に参加させようとする、却って引きこもりを助長し、逆効果となります。この場合は、本人が安心できる環境の中で、気心の知れている仲間との楽しい雰囲気づくりをすることが第一です。その集団の中で、本人が興味をもって楽しめる活動を探っていきます。

この活動は、できれば仲間との活動に発展していくことのできるものがベストです。例えば、紙切れを十分に入れたプールの中に潜ったり飛び込んだりすることに興味がある子どもは、きっかけ次第で、仲間と紙切れをかけ合ったり、鬼ごっこをしたりする遊びに発展していくことがあります。または、新聞紙を入れる大きなプールづくりに仲間と共に取り組んでいくかもしれません。「紙切れ」が媒介となり、仲間との接点が生まれるのです。このように、教師としては、いかに仲間と接点のもてる活動を探し出せる環境を整えるかが大切です。自閉症または自閉的傾向のある子どもの場合は、様々なことに興味を示してこだわって活動しますが、それが仲間との接点になる活動に結びつかないことがあります。また、仲間と接点のもてるものに興味を示した場合においても、仲間の参加をよしとせず却って仲間を避ける傾向を示すことがあります。ただ、このように仲間を避ける態度を示すからといって、本当に仲間を必要としていないという訳ではありません。仲間との関わり方には配慮が必要ですが、人との接し方を確実に身に付けていかなければならないものです。

そこで、2つの場合について考えてみたいと思います。「日常生活を営む上で身に付いていなければならない事柄」「日常生活を豊かにする事柄」です。

「日常生活を営む上で身に付いていなければならない事柄」とは、朝起きてから始まる挨拶、人への要求・依頼・訴え、感謝の表現などです。これらの事柄は、本人の興味のあるなしに関係なく身に付けていく必要のあることです。指導の場、時間など本人が苦痛に感ずることがないように配慮が必要ですが、必ず指導していかなければいけないことです。

「日常生活を豊かにする事柄」とは、友人関係を結んだり、趣味をもったりするなど生活を豊かにしていったりすることです。余暇の時間を一緒に過ごしたり、仕事の合間のちょっとした息抜きをしたりすることに関わっていることです。この場合は、学校現場において仲間と様々な活動を経験させるようにします。本来、興味の幅が限られている自閉症の子どもたちにとって、仲間と共有する楽しい活動は少ないからです。日常にある身近な素材から始めて、ゲームやスポーツ感覚で楽しめるものへ発展させていければよいと考えます。

興味・関心を生かして、友達と一緒に活動



自閉症または自閉的傾向のある子どもの生活単元学習の指導は？

単元構成の仕方は、まずは子どもたち一人一人の興味のあることを日常生活や保護者との対話からつかみます。全員が興味を示す事柄から活動の対象を考えていきます。その際、忘れてならないのは教師側として、

- ・ 子どもたちにどういう力（日常の生活に必要な力）を身に付けさせたいのか
- ・ 一人一人は活動内容をどこまで理解できる（理解、見通し）のか
- ・ 一人一人はどのような活動ができる（技術、技能）のか
- ・ どのような活動形態がよいのか

を具体化し、一人一人の単元目標を設定し、活動方法を考えていきます。

例えば、学級の多くの子どもたちが「乗り物」に興味を示していたとします。仲間との関わりを学習させる意味で「バスごっこ」を単元として取り上げます。単元目標は、つきたい力を考えて、

- ① 三輪車（バス）の運転に関わる技術の向上
- ② 信号に従う、決められた場所を走るなどの交通規則の順守
- ③ お金などの扱い
- ④ 順番待ち、交替などの習得

の4つの内容を学びながら、仲間との活動に「楽しさ」を体感できることを目指します。その際、一人一人の目標や活動方法は、その子どもの実態によって考えていきます。

ここで大切にしていかなければいけないのは、子どもたちの「やる気」です。いくら、興味を示しても、興味が持続していかないことが多いものです。だからこそ、単元始めに「体験活動」を位置付け、自分はどんなことをしたいのかを考えさせる必要があります。ここでいう体験活動とは、バス会社の見学です。あらかじめ教師が会社の方と打ち合わせをして、どのようなことを見せたり、会社の方から話してもらったりするかをセッティングしておきます。その上で、タクシーに乗せてもらったりします。

さて、活動方法ですが、個人に合わせて変えていくことが大事ですが、多くは、次のような1時間の学習の流れを考えています。

- (A)

活動理解の時間	活動の時間	振り返りの時間
---------	-------	---------
- (B)

活動理解の時間	準備の時間	活動の時間	片付けの時間	振り返りの時間
---------	-------	-------	--------	---------
- (C)

活動理解の時間	準備時間	活動の時間	仲間との活動	活動の時間	片付けの時間	振り返りの時間
---------	------	-------	--------	-------	--------	---------
- (D)

活動理解の時間	準備時間	仲間との活動	片付けの時間	振り返りの時間
---------	------	--------	--------	---------

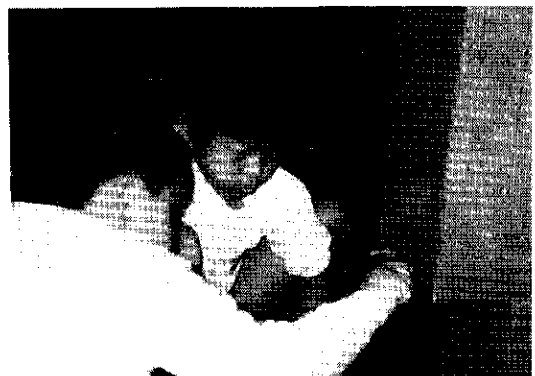
学級の実態として、仲間との関わりを好まない傾向がある場合は、(A)から始めていきます。この時の準備、片付けは主に教師が中心となって行います。次に、活動が楽しければ楽しい程、子どもたちは自分たちで準備しようとするので仲間との関わりが生じます。実態に応じてペアを組み、二人でもてるものを分担していきます。この繰り返しの結果、三人、四人と一緒に準備しようとしします。

ここで大切なのは、準備は喜んで行いますが、片付けにはあまり乗り気でないということです。そこで、準備も片付けも楽しめるように、道具に好きなキャラクターの絵を貼ったり、遊び感覚を取り入れたりします。新聞紙の活動をした後は、新聞紙を集めるのに「ブルドーザー」の形をした道具を用意するといった具合です。

次に、片付け、準備が子どもたちの手でできるよう(B)になってからは、一人一人の活動の中に仲間と活動する時間を適宜組み入れていくものです。その段階が(C)です。新聞紙を大型シャワーの箱の中に入れる活動を活動途中に組み、全員で取り組みます。

このような活動が楽しくできるようになってから活動の時間全部を仲間(ペアから全員)で行うように移っていきます。これが(D)段階です。

これらの活動の推移によって授業を考えていきます。



(2) 集団参加

集団参加は、「仲間の必要性を感じなかったり、必要性を感じても仲間を求めない段階」から、「仲間を欲しがり、共に遊び（活動）を楽しみたいと願う段階」へ、そして「自分の役割を考え、仲間と協調していく段階」までへと発展していくと考えています。

「仲間の必要性を感じなかったり、必要性を感じても仲間を求めない段階」にある子どもたちの場合は、必要性を実感させることから始まります。紙切れの中で遊ぶ子どもを例にとって説明しますと、仲間から紙切れをかけてもらうことや、教師に紙切れのプールの中に投げ入れてもらうことで、自分一人で遊ぶ以上の喜びを仲間との遊びで実感するわけです。これらの活動を深めていったり、様々な活動に広げていったりすることにより、仲間の必要性が意識されてきます。ただ、仲間の必要性を感じても、その活動をしたいと願えない場合があります。その場合は、活動したくない原因を明らかにすることが必要です。過去に仲間とのトラブルはなかったか、仲間との活動で嫌な思いをしたことがなかったかなど、探っていきます。

原因が明らかになった時は、子どもの状態にもよりますが、地道な話し合いによって解決していきます。子どもの言い分を十分聞いて、その苦い思いを教師が受け止めていくことです。話し合いができる状態の子どもでないならば、仲間との活動をゆるやかに進めつつ、仲間とのトラブルが原因ならば、トラブルになったもとをその子どもに示し、その対処の仕方を実際の場で指導していきます。また、仲間との活動で嫌な思いをしているのが原因ならば、その原因を教師が中心となって取り除いていきます。こうすることによって、仲間との活動を避けていく気持ちが薄らいでいきます。

「仲間を欲しがり、共に遊び（活動）を楽しみたいと願う段階」にある子どもたちの場合は、その遊び（活動）を十分に味わわせることが重要です。その上で、役割がしっかりとした組織的な遊び（活動）に取り組みさせていきます。最初、はペアから始めます。ホットケーキを作る時に粉、卵、牛乳をボールに入れてかき回しますが、片手で泡立て器を持ち、もう片方の手でボールを持って一人でかき回すことは大変難しいものです。その際、ボールを持つ係、泡立て器でかき回す係と二人で分担して作業をすると楽に行えます。

このように、作業を分担して行うことの有効性を、実際の中で体感させていきます。次に、三人から四人のグループを作り、それぞれがホットケーキの上に乗せるフルーツの準備をします。早くできた子は仲間の作業を手伝う約束にします。早く作業を終え、食べたい子どもたちは、仲間と自然に協力し合えるものです。全員が楽しみにしていることを、仲間で分担して協力して行う体験が多く積まれることにより、子どもたちに「責任」と「協力」の意識が生まれてきます。



(3) 言葉

仲間との関わりをもつ場合に大切なことは、相手に自分の意思を伝えること、相手の意思を受けとり理解することです。その点で、言葉は重要な意思伝達手段です。

しかし、障害のある子どもたちは、言葉の面が十分発達していないことが多いです。

構音障害などを含めて発音に問題がある場合は、学校での指導に加え、治療の専門家による特別な指導が必要な場合があります。それぞれが単独に指導するのではなく、お互いに連絡を取り合って情報交換をする

ことが必要です。

障害により、うまく意思を伝えられない場合は、話し言葉以外のコミュニケーション手段（サインやカードなど）を使いながら、教師や仲間との関係を深めていきます。この時、教師側から働きかけていくことが重要です。話をすることが苦手な場合は、無理やり話をさせようとすると逆効果を招くことが多いようです。教師や仲間を含めて教室が楽しい雰囲気になるようにします。いろいろな場面で歌を歌ったり、写真や絵などから話のきっかけをつかんだりしながら、子どもたちが興味をもって楽しみながら話ができるような工夫をします。子ども自身が、無理に頑張る話をしなくてもいいんだと感じられるようにすることも大切です。

2 楽しみながら、無理のない環境の中で通常学級児童・生徒との交流指導を

ここでは、「開かれた特殊学級」「共に学ぶ特殊学級」の2項目に分け、その指導を考えます。

(1) 開かれた特殊学級

通常学級の子どもたちは、遊具がたくさんそろっている特殊学級の教室に興味をもちます。特殊学級を開放すると、低学年を中心に子どもたちがやってきます。しばらくの間、子どもたちは自分の遊びに夢中になりますが、やがて特殊学級の教師に様々な疑問を投げかけ、遊具で遊んでいる障害のある子どもに話しかけるようになります。そこで、子どもの様子をよく見て、以下のことを試してみましょう。



- (1) 各種ボール、長縄、ブロックなどの身近な遊具をできるだけ多く用意します。遊びが高まってくると、特殊学級の子どもたちを巻き込んだ遊び（ミニバレーなど）に発展していくことがあります。
- (2) 特殊学級の子どもたちが製作した遊具（大型すごろく、巨大迷路、ジャンボかるたなど）を、いつでも使えるようにしておきます。遊びに興味を示す通常学級の子どもたちと、遊びに慣れ親しんだ特殊学級の子どもたちが、一緒に遊んで楽しめます。
- (3) 教室の中に、「作品コーナー」を設けます。できれば、一人一人の得意なものが展示してあると望ましいです。例えば、折り紙が得意で、様々な種類の作品が折れる子どものコーナーには、その作品を展示しておきます。興味をもった子どもが、一緒に折り紙をしたり、教え合ったりする機会が生まれます。

(2) 共に学ぶ特殊学級

学校行事には、子どもの状態によりますが、原則的に「参加」していく方向で考えていきます。運動会や音楽会などは、通常学級の子どもたちに、障害のある子どもが最大限に力を発揮している様子を見てもらえる絶好の機会です。こうした取り組みが積み重なっていくと、障害のある子どもへの理解が促されます。そ

の結果、1学年でドッジボール大会を開くような時などに、参加が難しい既存のルールを改正して、参加しやすい工夫を通常学級の子どもたちから生み出してくるようになります。

4 教師間の共通理解の上に立った指導を

校長をはじめ、通常学級の教師が、特殊学級の子どもたちと積極的に関わることが、子どもたち同士の自然な交流を生み出す重要な要素となっています。子どもたちは、担任が楽しそうに特殊学級の子どもと関わる姿を見て、自分も関わっていききたいとの願いをもつものです。この関わりの中から「どうして、あの子たちは、〇〇学級（特殊学級）にいるの」「同じ言葉を繰り返すのはどうしてなの」と、素朴な疑問を持ちます。この時に、子どもに偏見を植えつけさせないための適切な答えが返せたり、人としてどのように接するとよいのかを含めた方向性のある答えが返すことができるかが、かなり重要になってきます。

そこで、以下のような教師間の交流をもち、障害児教育の共通理解を図っていくようにしましょう。

- (1) 特殊学級の保護者向け通信並びに教師向け通信を発行し、子どもの成長や頑張り、日々の指導内容やねらいについて、そして、障害児教育全般の基礎的な事柄に対する理解を図っていきます。
- (2) 積極的に公開授業、研究授業を行い、全校の教師に子どもの様子を見てもらいます。授業後の研究会などで、子ども一人一人の頑強りを明らかにしたり、講師を招いて発達や障害についての研修をしたりします。
- (3) 特殊学級と通常学級の交流を推進する会を設けます。お互いの学級の子どもにとり、交流は望ましい活動です。日々の交流のほか、各学年の取り組みにどのように参加していくのかを検討します。

5 保護者との連携を生かした指導を

学校で身に付けた力が家庭の中でも発揮され、また家庭できていることが学校でもできることが望ましいことです。そのためには、教師と保護者の情報交換が最も大切になります。日々の保護者との対話や授業参観、懇談会、連絡帳や通信などの様々な機会を有効に使っていきます。その時心がけたいことは、その日に起こった出来事の羅列に終わるのではなく、「今、～の力を育てたいので、～の指導を行っています。そうしたら、～のようになってきました。ご家庭での、このことを大いに誉めてくださいね」「ご家庭でも～のことについて取り組んだり、励ましたり、誉めてくださいね」と、指導の内容などについて具体的に伝えることです。

例えば、交流学級の誕生集會に誘われていて、その場で話をする事になっている場合、「朝の会では、友達の前で話す練習をしています。去年は『ありがとう』と短い言葉で言うことができたので、今年は、誕生集會に参加できる喜びと、仲間がいてくれる嬉しさを添えて『ありがとう』を伝えるようにします。今日は、紙を見ながら最後までお話しできました。この頑強りをお家で大いに誉めてあげてください。できましたら、家族の前でもお話をする練習をして、応援してあげてください」のように、具体的に伝えます。



また、保護者からは、学校では見届けられない近所の子との遊びや、付き合い方について情報をもらいます。この情報をもとに社会性について生活単元学習などの学習内容を見直していきます。

尚、交流を行った時などは、通常学級の担任に連絡帳を書いてもらうことも大切なことです。このように、教師と保護者が同一歩調で指導に当たることで子どもの成長がより促されていきます。

集団の中に入って、すぐ叩いてしまう子の指導は？

学年集会や全校集会では、体育館や運動場に一堂に会します。そんなときに、特殊学級の子どもが回りの子どもを叩いたり、服を引っ張ったりしている姿を見かけることがあります。その場合、どのように指導したらよいのでしょうか。

子どもが叩く理由や相手に着目しながら考えてみましょう。

◇ なぜ叩くのか

「なぜ叩くのか」という原因は様々ですが、

- ① 嫌なことがあってイライラしていた。集団内においてストレスがたまったなどの場合
- ② 仲間と関わりたくて手を出してしまう場合

の2通りに分けて考えることができます。

嫌なこと、ストレスがあって手を出す場合は、原因を取り除くことや時間をかけて集団内に入ることのできる指導を行っていかねばなりません。ストレスがたまる場合には、無理に集団内に入れることは却って逆効果です。

仲間と関わりたくて手を出してしまう場合は、関わり方を本人並びに回りの子どもに指導します。本人には、叩く前に話しかけること（それが無理な時は声を出すこと）、トントンと軽く肩をたたいたりすることを繰り返し指導します。回りの子どもには、叩く理由（仲間になりたい）を理解してもらい、その接し方を指導していきます。ふれ合いたいと願っている特殊学級の子どもには、時と場に応じますが、手をとってふれ合ってもらいます。

◇ 特定の子を叩く

その子との間にある問題を探ります。本人、相手の子、回りの子などから情報を集め、その関係が改善されるように指導していきます。

（参考文献）

「障害児教育にチャレンジ22」関西障害児教育研究会著明治図書